

令和5年度 学校経営方針  
-2050年の地域の作り手を共に育てよう-

0 はじめに

狛江第五小学校に着任して、様々なことに驚いている。正確には驚きというより喜びである。

初めに、職員に活気があることである。学校は活気がなければ、子供は育たない。職員は明るく、前向きである。この明るくて前向きな職員の存在を学校経営の土台としたい。

次に、子供たちには、「元気さ」と「賢さ」を感じている。多くの子供たちが休み時間に外遊びをしている。そして、校内、校外を問わず、明るく挨拶ができる。私たち五小の職員は、子供たちの「元気さ」と「賢さ」が失われるような教育を絶対にしてはならない。

最後に、保護者、地域の方は、五小に大変強い関心を示している。昭和43年の開校以来、五小の歴史の中で保護者、地域の方が五小の発展に果たした役割はとても大きい。五小は、保護者、地域の誇りであり、生き甲斐であるのかもしれない。私たち職員は、この期待に応えなければならない。

令和5年、五小は創立56年目、55周年の年である。五小の教育を単にコロナ禍以前に戻してはならない。コロナ禍をきっかけとして、私たちはこれまでの教育活動を大きく見直すことができた。明治5年の学制頒布以来、なんとなく継続してきたことを大きく見直してきた。令和5年4月の段階で、学校教育へのコロナ禍の影響は限定的なものになりつつある。今こそ、五小は、5年後の創立60周年、更には45年後の創立100周年を見据えて再出発する時である。ゴールは教育目標の達成であり、SDGsとして示された17の目標達成に貢献できる2050年の地域の創り手を育てることである。

教職員一人一人が柔軟に発想し、一匹狼のたくましさを持ちながら、常にチーム五小を意識しつづき一丸となって教育に当たることで、五小の教育を共に創ろう。そして2050年の地域の創り手を共に育て、五小を「世界一通いたくなる学校」にしよう。

1 狛江市教育委員会教育目標

- 互いの生命と人格・人権を尊重し、地域や社会に貢献する意識の醸成
  - 確かな学力の定着と個々の能力や創造力を伸ばし、郷土や国を愛する心をはぐくむ学校教育の充実
  - すべての世代にわたる市民のための学習環境と運動環境の整備
- 以上3つを教育目標とし、5つの基本方針と16の施策を示している。

基本方針1 生きる力をはぐくむ質の高い学校教育の推進

- (1) 生命と人格・人権を尊重する態度の育成
- (2) 生涯に渡って生きて働く力の育成
- (3) 国際社会で活躍できる力の育成

基本方針2 家庭・地域との協働による学校教育の推進

- (1) 開かれた学校づくり
- (2) 家庭・地域の人材や教育資源の活用

### 基本方針3 教育環境の整備

- (1) 安心安全な学校生活のための環境整備
- (2) 学習環境の整備
- (3) 個に応じた教育の実現に向けた環境整備

### 基本方針4 生涯を通じた学びの充実

- (1) 学びの環境づくり
- (2) 生涯を通じた学びの実現
- (3) 学びを活<sup>ママ</sup>かす機会の充実
- (4) スポーツへの参加機会の充実
- (5) ライフステージに応じたスポーツの推進

### 基本方針4 歴史への理解と継承

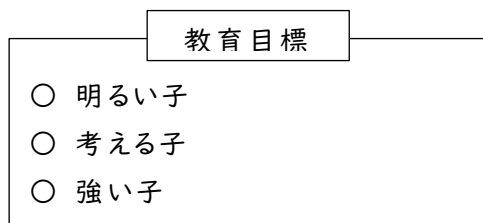
- (1) 歴史の継承・文化財の保存
- (2) 文化財の活用の推進
- (3) 伝統文化の保存と活用

本校の特性として「保護者・地域の学校への強い関心」がある。基本方針2に「家庭・地域との協働による学校教育の推進」とあるとおり、保護者・地域との連携なしに五小の教育は成り立たないことを自覚したい。

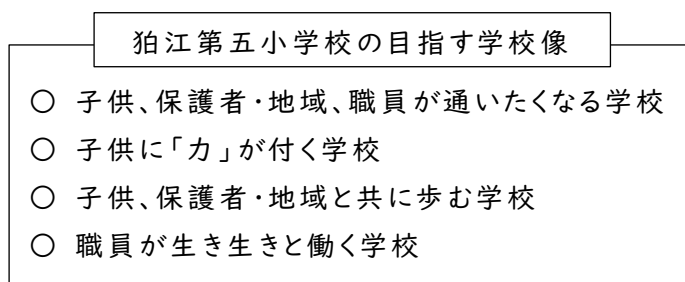
昨年度から本校はコミュニティ・スクール(地域と共にある学校)となった。将来地域で活躍する人材を地域の学校で、地域の方と共に育てよう。

## 2 本校の教育目標

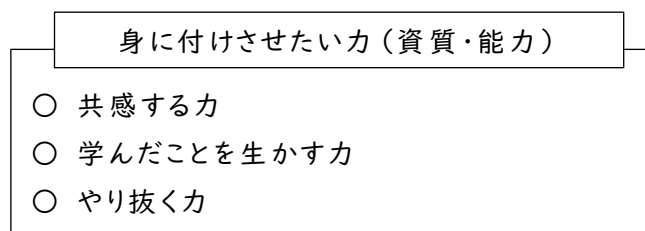
目標はお飾りではない。目標は示した限り、保護者及び地域への公約である。具現化しなければ、全く意味をなさない。私たちは頑張りましたというだけでは、誰も納得しない。結果が問われているのである。よって、教員は指導に当たって、子供の発達段階に合わせてより具体的な目標を定め結果を出す努力を日々重ねていくこと、主事等の職員は、各担当において教育目標の達成に向けたよりよい環境づくり等を実践していくことが求められる。



## 3 本校の目指す学校像、身に付けさせたい力(資質・能力)



子供たちには「力」を付けたい。目の前の子供たちは 2050 年の大人である。2050 年の地域の創り手である。2050 年の大人に必要な力を身に付けさせたい。五小の子供たちに身に付けさせたい力（資質・能力）として、次の3つを設定する。



#### 4 五小が目指す姿（教育の方向性）

##### (1) 目指す教室の姿

###### ア 居場所のある学級

学校で子供が安らぎを感じるのは学級である。私を見てくれている、私に話しかけてくれる、そんな人（友人、教職員等）がいる学級にしたい。自己肯定感、自己有用感、そして自己存在感のある学級は、子供にとってきっと楽しい学級になるだろう。

###### イ 刺激のある教室

教室は子供にとって生活の場であり、学習の場である。安らぎのある生活とともに学習の刺激が備われば、子供は知的欲求を満たされるようになるであろう。学習する仲間としての意識が子供同士に芽生えれば、相互啓発のある豊かな学級になるであろう。

学びの姿は多様でいい。学制頒布以来の黒板に向かって机を前に子供たちが椅子に腰掛けている姿、これだけが学びの姿だろうか。学習形態を工夫し、学習の場を工夫し、時に机と椅子から解放されて学ぶ、このような学びの姿があっていい。タブレット端末を手に教室を飛び出そう。教室だけが学びの場ではない。五小全体をラーニング・コモンズと考えよう。

###### ウ 達成感あふれる教室

子供たちに達成感を味わわせよう。最後まで頑張らせよう。

五小の子供たちには最後まで頑張らせたい（頑張りの度合いは一人一人異なることに留意）。多少の困難には負けずに、たとえ、途中で心が折れそうになったとしても、青竹が強い力で曲げられたとしても、その姿を回復しまっすぐ上に伸びていくようなしなやかな強さ、たくましさ、レジリエンスを子供たちには付けていきたい。

子供たちには最後まで頑張らせよう。頑張ったことによる達成感を味わわせよう。そして、チーム五小は、そのために子供たちを全力で支援しよう。

###### ウ 多様性を認め合う教室

「ダイバーシティとインクルージョン」、これは2050年の大人には欠くことのできない力である。2050年の大人は、多様な人種、多様な文化、多様な考え等を避けて生きていくことはできないはずである。自分と違うという理由だけで他を排除する、そのような態度では2050年を生き抜くことはできない。自分を大切にするとともに、他も大切に。少数意見を否定するのではなく、その良さを認める。このような多様性を認め合う、個性あふれる子供たちの集う教室を実現しよう。

## (2) 目指す職員の姿

### ア 児童理解を深める職員

子供はいつでも味方を欲しがっているに違いない。その心に共感し、寄り添ってこそ、指導すべきことが分かる。子供の言動は時にわがままなものと見えるかもしれない。でもその時、思いだけでも誰かに聞いてもらえたら、子供は自己修正するきっかけをつかむだろう。

※ 心に寄り添うとは…

「心に寄り添う」とは、子供の考えていること、子供の感じている辛さ等を分かろうとし、子供が考えや辛さ等を十分表現できるように手伝うことである。「何をしたいのか」「どんなふうに辛いのか」を丁寧に聴き、子供が表現したことをしっかりと受け止めよう。子供たち一人一人の心に寄り添い、肯定的な関わりを通して、学級・学校を子供たちにとって居心地のよい場にしよう。

### イ 教えることを恐れない職員

教えるべきことは、徹底して教えよう。主体性が大切にされるあまり、大人は、教えることを遠ざけてしまっていないか。青少年の規範意識の希薄さが指摘される時、学校教育は無関係だという職員はいないだろう。そして、教員には見えないものが教師以外職員には見えているはずである。五小の職員として、大人の代表として、子供たちに教えるべきことは教えよう。五小は、教えるべきことを教えられる学校になろう。

### ウ 保護者の期待に応える職員

第一に、子どもの生命の安全確保である。その上で教育の充実を図っていく。また、病気や事故発生の際の適切な対応は欠かせない。学習指導にあっても、危機管理は重要である。

第二に、子供は担任を選べないということを肝に銘じるべきである。教師としての技量を磨き、自己の能力や経験を最大限に生かせるようにして、保護者の思いや願いを傾聴し、その理解に努めよう。

### エ 未来を見つめる職員

私たちは、将来の地域（狛江、東京、日本、アジア、世界…）を支えていく子供たちを預かっている。この子供たちは、私たちが経験したことのない予測不可能な時代を生きることになる。未来に思いをはせ、五小の子供たちに接したい。2050年の大人たちに必要な力を考え、その力を付けるために必要な教育を考えよう。まずは、先に挙げた「共感する力」、「学んだことを生かす力」、「やり抜く力」を確実に子供たちが身に付けられるようにしよう。

## 5 教育課程との関連

### (1) 心の教育の充実

いじめ、不登校のない学校にする。心の教育の果たす役割は重要である。生活指導は即効性を求めるのに対し、心の教育はゆるやかで時間のかかる開発的な取組である。だからこそ、週1回の道徳の時間を大切に、確実な授業を積み重ねよう。

### (2) 授業は子供を育てる場

子供を見つめた授業を展開しよう。子供は、授業の中で最も「先生」を意識する。子供たちに勉強するってどうすることですかと質問すると、先生の話をよく聞くことと答える子どもが少なくない。「自分が変わる事」「問題が解決すること」「自分が成長してよりよくなること」などと答えるような五小の子供を育てたい。

そのために、子供に「自己の変化」を伝えよう。できるようになった自分、先生に見られている自分の存在に気付かせよう。小さな変容は、他の子供には気付きにくい。小さな変容があったら、学級のみみんなの前で褒めよう。

また、子供の考えにじっくり耳を傾けよう。授業では、子供が何を考えているのかを常に教師が問う姿勢をもとう。「変な意見」「変な考え」こそが授業の宝である。子供たちの発言や行動には何らかの意味がある。

### (3) 不易と流行

教育には変化してはならないものがある。ここまで示してきたことはどちらかといえば不易の部分である。対して、変化するものもある。新しい教育課題がそれである。タブレット端末 (ICT 機器) の活用、英語教育・外国語活動への対応など。加えて、主体的・対話的で深い学びの基盤となる言語活動を更に充実させるための学習情報センターの活用。いずれもが 2050 年の大人たちに必要な力と大きく関わっている。

## 6 その他 (心構えのようなもの…)

### (1) 組織的な対応で学年、学校としてのまとまりを

4月当初、五小には大きな危機があった。自転車事故の件である。この時の学年を超えた対応、当事者任せにせず、各自が自身の持ち場を意識し対応していた。見事な対応だった。

小学校の教師は、学級事務を一人で負っているからか、問題が発生した場合、全ての責任が自分にあるように受け止めがちである。そうではなく、学年または学校が処すべき問題ではないかと、立ち止まってもらいたい。一人で悩まないでもらいたい。五小の教育は狛江第五小学校という組織が行うものである。

子供たち一人一人を育てるには、五小という大きな舞台が必要だと思ってもらいたい。五小の全職員の知恵を結集して、目の前の子供一人一人に向かおう。子供の明日の成長を期待して。

### (2) 根拠のある仕事を

私の経験から、学校の仕事の多くは前例踏襲、根拠は口伝であった。前例踏襲は悪いことではない。しかし、なぜそのようなことが行われているのか立ち止まって問い直そう。公務員は法令によって仕事の規定されている。その仕事に根拠はあるのか。子供、保護者・地域に根拠をもって説明できるのか。根拠をもって仕事をしよう。

### (3) 「動的平衡」を保ち持続可能な学校の構築を

学校は持続可能でなければならないと考えている。そして「動的平衡」を持続可能な学校であるためのキーワードとして捉えている。内部は常に激しく変化しながらも全体として大きな変化はなく、しかも成長していく。学校を「動的平衡」を保てる組織としたい。

生物は自らの細胞を常に破壊し、自ら新しい細胞を作っている。この営みのくり返しが続く限り「命」は続く。逆にこの営みが途絶えた時、生物は死を迎える。

組織も同様である。学校は持続可能でなければならない。そのためには、破壊と創造を繰り返さなくてはならない。「上手くいっている」「反省はなかった」「昨年と同様に」このような時には「本当にそれでいいの？」と批判的思考力を働かせてみよう。伝統は大切である。しかし、漫然と同じことを繰り返すことを伝統とは言わない。伝統を守るためには血のにじむような努力があり、時代に合わせた変化がある。

常に創造を続ける五小を共に創ろう。